

## 興味・関心を重視したキャリア教育の問題

—職業アスピレーションとジェンダー—

寺崎里水\*

### The Problem of the Career Education Emphasizing Interests and Concerns :

Occupational Aspiration and Gender

TERASAKI Satomi

#### abstract

The purpose of this paper is the following. 1) To examine the regulation factor of occupation aspiration. 2) To examine the influence of socioeconomic variables, especially sex. 3) To consider the problem of the current career education.

This research is based on the Japan Education Longitudinal Study 2003, which aims to investigate many development aspects of children from elementary school to the stage of getting a first job. In this paper, the data used for analysis consisted of junior high school students of a metropolitan area and a rural area.

From analysis, it became clear that 1) the regulation factors of occupational aspiration differed in A area and C area. This difference derived from the differences in the shapes of family lifestyle, and regional characteristics and educational environments. 2) In A area, the attribute factors, especially sex, had done influence greatly to aspiration. 3) The school has adopted the guidance principle which approves these trends. The school has introduced the educationally valuable vocabularies of career choice in response to the criticism to "cram education." Since these vocabularies are educationally valuable, it is much more difficult for educators and researchers to point out the problem.

Keywords : career education, occupational aspiration, gender, junior high school student, gender role

#### 1. 問題の所在

人々はどのように職業的好みを形成し、それらを遂行し、または遂行しようとするのだろうか。あるいは、個人的好み以外のいかなる要因が職業的運命を決定するのだろうか。個人の側からみた職業選択は、構造の側からみれば社会移動である(太郎丸 2006)。職業選択(構造の側からみれば社会移動)が、あらかじめ社会において優位な地位を占める人々にとって有利なメカニズムを備えているのであれば、このメカニズムについて批判的に見当を加えなければなるまい。というのも、現実の職業参入の規定要因として社会的経済力は重要であり、しばしば動機や価値、若者が職業構造に対して抱く好みをも形成するからである(Sofer 訳書 1980)。

しかるにわが国では、職業選択に関する研究は心理学的な観点からのものが多くを占め、社会学的な観点から

---

キーワード：キャリア教育、職業アスピレーション、ジェンダー、中学生、性別役割規範

\*平成10年度生 人間発達科学専攻

の検討はほとんど加えられてこなかった。心理学的な研究は職業選択過程における個人の認知メカニズムを重視している。個人の自己効力感や職業的関心、価値意識等に注目し、それらの差異をおもに個人の発達に帰して理解してきた（たとえば宗方・渡辺 2002、日本労働研究機構 2001、2003）。本研究は職業的発達という考え方を否定するのではないが、発達段階論によって個々人の差異を理解しようとすることによって、社会構造の影響を過小評価する可能性を危惧している。

ここでいう社会学的な観点からの検討とは社会構造の影響、すなわち階層や性、地域に基づく格差を分析の視野にいれるということである。このことが喫緊の課題とされるのは、次のような状況による。

#### ①社会的地位達成過程の変化

社会的地位達成（社会的資源の獲得）の程度が職業によって代表され、その職業への参入に学歴が大きな役割を果たす日本においては、社会的地位達成を規定する主たる要因として教育アスピレーション（どの程度の教育達成を志向するか）に注目が集まっていた。しかし近年、耳塚編（2000）や荻谷（2001）、荒牧（2001）、片瀬（2005）らの高校生を対象とした分析において、職業アスピレーション（どの程度の社会的地位達成を志向するか）と教育アスピレーションの結びつきが弱くなり、かつ進路選択や職業選択に対する学校の規定力が弱まっているという指摘がなされた。これまで教育社会学は教育アスピレーションと社会経済的・文化的要因との関係とに着目してきたが、それは「いい成績をとって、いい大学に行き、いい会社にはいる」という地位達成のあり方が自明だったからである。職業アスピレーションと教育アスピレーションとが切り離される傾向がうかがえるのなら、職業アスピレーションに対してどのように社会構造の規定力が働くのかを、教育アスピレーションとは別に考察していく必要がある。

#### ②若年無業の社会問題化

熊沢（2006）は1960年代から80年代にかけて、学校現場では「まともさ」の誘導と強制が行われていたが、近年、それが変わりつつあると述べた。「かなり多くの若者が、卒業後はかならず働くと思いつめておいてはいるわけではない、職業選択の方向決定も準備もできていない、とりあえず就職してもそこに定着しようとするがんばりがきかない・・・（中略）これらは労働世界の客観的な状況に対する若者の、とりわけ恵まれない家庭的背景を背負う若者の、ある意味では自然な適応です（熊沢 2006：118）」熊沢のように、若年無業について、90年代以降の厳しい労働状況によって、あるいは親子関係の変質によって、あるいは学校に対する信頼が薄れて、若者が働くこと、成人役割を引き受けることに対して、積極的な意義が見出せなくなっていることに原因を求めようとする議論は広く見受けられる。たとえば政府による「若者自立・挑戦プラン」（2003年）においても、一方で若年労働市場の悪化を指摘しながら、他方で若者の働く意欲の不足を指摘し、職業意識の涵養を掲げている。このような議論のなかで不足しているのは個人の職業意識に及ぼす社会経済的・文化的要因の影響という視点である。労働市場の変化や教育改革の影響といった要因が個人の意識に影響を及ぼすとして、その場合、どのような社会的カテゴリに属する若者がこういった問題によりあてはまるのか、という問題について考察していく必要がある。

#### ③学校におけるキャリア教育

現在、小中学校段階でのキャリア教育が積極的に実施されているが、この政策の裏づけになっているのは、「就職・就業をめぐる環境の激変」のほか、「若者自身の資質等をめぐる課題」についての「勤労観、職業観の未熟さ」「社会人・職業人としての基礎的資質・能力の低下」「社会の一員としての意識の希薄さ」という認識である。また、「高学歴社会におけるモラトリアム傾向」のなかで、「働くことや生きることへの関心、意欲の低下」や「職業について考えたり、職業の選択・決定を先送りにするモラトリアム傾向の高まり（以上、文部科学省 2005：1）」がみられることも指摘されている。現行のキャリア教育は、「できるだけ自分の興味を焦点づけ、自分の能力や適性にふさわしい職業を見出すこと、インターンシップ等で職場の現実を早くから知っておくこと（宗方・渡辺 前掲：27）」を重視しており、これは先に述べた職業認知に関する心理学的研究の成果に大いに依っている。

しかし、これまで述べてきたように、残念ながらそこには認知の過程に社会経済的・文化的要因が影響を及ぼす可能性があるという視点が抜け落ちており、学校の中でより職業意識を高める傾向にあるのは誰かという問題

を考察することができない。さらに、学校という場は「教育という相対的に自立性をもった場の内部に完結する問題が、主たる教育問題として語られ」てきたため、そもそも「〈社会〉との接点を失った、不平等という構造問題への視点（以上、荻谷 前掲：94）」を欠く傾向がある。ゆえに、社会経済的・文化的要因の影響を捉えることが困難であるばかりか、そのことを認識すべき問題として「的確に語ることをばをもたないという、もうひとつの危機（荻谷 前掲：ii）」を抱えている。

以上をふまえ本稿では、第一に、教育アスピレーションと職業アスピレーション、それぞれに対する社会構造の影響が実際どのようなものであるかを明らかにし、第二に、社会構造の影響を分析の視野に入れることによって、現行のキャリア教育において、どのようなことが問題として新たに立ちあがるのかについて、とくに性別に注目して検討していくことにする。

## 2. 使用するデータの概要

本研究で用いるデータは、お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラムの一環として行われている追跡調査 Japan Education Longitudinal Study 2003（以下 JELS2003 と略）によるものである。JELS は 3 年ごとに実施する縦断的調査研究であり、JELS2003 とは 2003 年から 2004 年にかけておこなわれた基礎年次調査（WAVE1）をさす。WAVE1 では、複数のエリアの、それぞれ小学校 3 年生、小学校 6 年生、中学校 3 年生、高等学校 3 年生を対象に、児童生徒調査（質問紙）、学力調査（国語、算数・数学）、保護者調査（質問紙）、担任教員調査（質問紙）、地域、学校の状況に関するヒアリング調査を実施した<sup>1</sup>。

表 1 調査の実施状況（生徒票ベース）

	設定数	マッチング数	マッチング率
Aエリア	1128	581	51.5
Cエリア	1022	951	93.1
◎Aエリア	◎Cエリア		
・関東地方 人口約25万人の中都市	・東北地方 人口9万人弱の小都市		
・産業大分類別就業人口(平成12年度) 第一次産業0% 第二次産業35% 第三次産業65%	・産業大分類別就業人口(平成12年度) 第一次産業10% 第二次産業30% 第三次産業60%		
・2003年10月-2004年2月にかけて実施	・2004年11月実施		
・市内半数の公立中学校を無作為に抽出	・当該学年悉皆調査		
注) マッチング: 生徒質問紙および数学学力調査を同一IDで統合した。 マッチング数はその数、マッチング率は設定数に対する割合。			

本稿では、関東地方 A エリアの公立中学 3 年生と、東北地方 C エリアの公立中学 3 年生のうち、生徒質問紙調査と数学学力調査を受験し、かつ、これらを同一の ID のもとにマッチングできた場合のみを分析の対象とする<sup>2</sup>。調査の実施状況および各エリアの特徴は表 1 に示したとおりである。

## 3. 教育アスピレーションと職業アスピレーションの規定要因

教育アスピレーションと職業アスピレーション、それぞれに対する社会構造の影響が実際どのようなものであるかを見ていこう。ここでは教育アスピレーションと職業アスピレーションをそれぞれ従属変数にした重回帰分析から明らかにする。

### 1) 分析に用いた変数

#### ①従属変数

教育アスピレーション：中 3 時点で希望している最終学歴段階を教育年数に置き換え、教育アスピレーションの高低を測る。年数変換の方法およびエリアごとの教育アスピレーションの分布は表 2 のとおりである。

表2 教育アスピレーション

	年数変換	Aエリア	Cエリア
中学校	9	1.1	1.3
高校	12	12.2	18.0
専門・各種	14	22.7	32.9
短期大学	14	10.4	5.2
大学	16	46.8	38.5
大学院	18	5.0	2.4
その他	MV	1.4	0.6
無回答	MV	0.4	1.1
合計		100.0	100.0
N		278	462

注)どの学校段階まで進みたいかの回答

「年数変換」は教育年数に置き換えた場合

「MV」は欠損値扱い

職業アスピレーション:「将来やりたいしごと」について自由記述で回答を求めた。回答を標準職業分類に依拠して分類し、さらにSSM職業威信スコアをあてはめることで、職業アスピレーションの高低を測る<sup>3</sup>。従来の職業アスピレーションに関する研究では、自由回答を「専門職」「マニュアル」といったようにいくつかの職業カテゴリにあてはめて分析してきた。たとえば片瀬(2005)は1980年代半ばと1990年代後半とを比較し、女子の「専門職志向」が高まっていることを指摘している。しかしこの方法はカテゴリ内の多様性について十分に把握することができないという限界がある。この点、一元的な序列のもとに数値が与えられるSSM職業威信スコアは「専門職」カテゴリ内の威信の高低を捉えるのに適している。

## ②独立変数

家庭的背景に関わる変数について、JELSでは過去の調査設計を参照し、10の設問を準備した。これらを独立変数とし、教育アスピレーションと職業アスピレーションそれぞれを従属変数とする重回帰分析をあらかじめ行い、有意な変数のみを分析に投入することにした。結果、「お父さんは大学を出ている(以下の分析では父大卒ダミーと表記)」、「本(マンガや雑誌以外)がたくさんある(同、家に本があるダミー)」の2つを、家庭的背景を示す変数として採用した<sup>4</sup>。父親の学歴は家庭の社会経済的状況や、家庭の大学進学に対する構えの有無に関わる変数として、また本の数は家庭の文化資本の蓄積度に関わる変数として、先行研究でも分析に用いられてきた変数である<sup>5</sup>。

これらに加えて、性別、平日の家での学習時間(分)、学校外学習機会の利用(受験塾、補習塾)、学力(数学学力調査通過率<sup>6</sup>、以下では数学学力と略)を用いる。各変数の概要は表3のとおりである。

表3 分布に用いる変数

	Aエリア(N=278)		Cエリア(N=462)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
教育アスピレーション	14.9	1.7	14.5	1.7
職業アスピレーション	60.7	10.3	57.3	10.5
平日の家での学習時間(分)	68.8	57.2	101.6	64.6
数学学力	65.2	20.1	63.6	21.3
		比率		比率
性別ダミー(男子=1)		38.1		45.0
父大卒ダミー(大卒=1)		45.7		27.9
家に本があるダミー(ある=1)		49.3		47.9
受験塾通塾ダミー(通塾=1)		60.1		41.1
補習塾通塾ダミー(通塾=1)		33.8		25.5

## ③分析対象者

分析に用いる変数に該当する調査・質問項目がすべて有効回答を得ている者を重回帰分析の対象とする。Cエリア462ケース、Aエリア278ケースとなった。

2) 重回帰分析

教育アスピレーションと職業アスピレーションをそれぞれ従属変数にした重回帰分析を行った。表4から、Aエリアでは、①教育アスピレーションの主な規定要因は、数学学力、性別、父学歴である、②職業アスピレーションの主な規定要因は性別であることがわかる。一方Cエリアでは、①教育アスピレーションの主な規定要因は、数学学力、父学歴、平日の家での学習時間である、②職業アスピレーションの主な規定要因は、数学学力、父学歴、性別である。

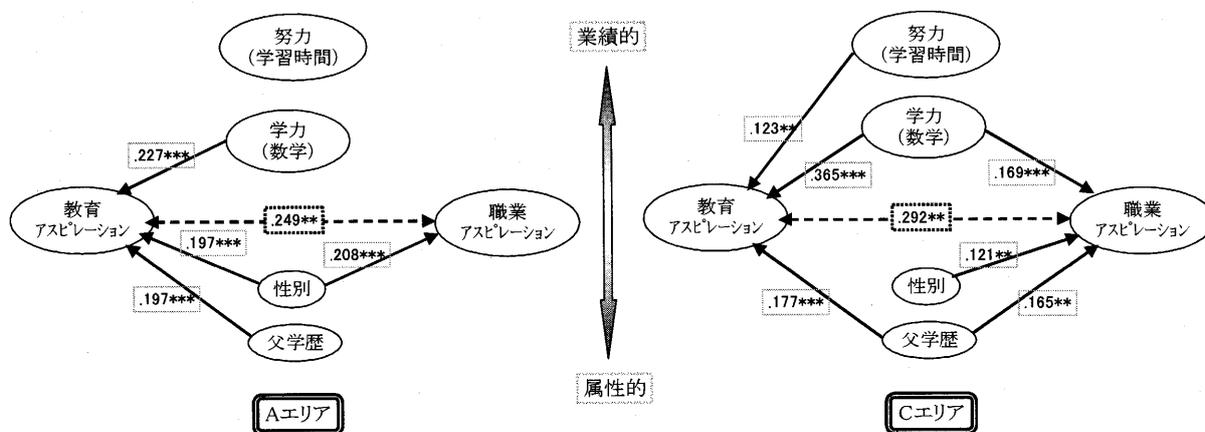
表4 教育アスピレーション・職業アスピレーションの規定要因（重回帰分布）

	Aエリア		Cエリア	
	教育アスピレーション 標準化偏回帰係数	職業アスピレーション 標準化偏回帰係数	教育アスピレーション 標準化偏回帰係数	職業アスピレーション 標準化偏回帰係数
性別ダミー	0.197 ***	0.208 **	0.041	0.121 **
平日の家での学習時間	0.109 *	-0.051	0.123 **	0.024
父大卒ダミー	0.197 **	0.111	0.177 ***	0.165 ***
家に本があるダミー	0.135 *	0.064	0.109 **	0.107 *
受験塾ダミー	0.122 *	0.061	0.019	-0.032
補習塾ダミー	0.089	-0.016	0.102 *	0.067
数学学力	0.227 ***	0.088	0.365 ***	0.169 ***
F値	12.484	3.574	22.781	7.593
sig.	0.000	0.001	0.000	0.000
調整済みR <sup>2</sup> 値	0.233	0.063	0.254	0.092

注) \*\*\* p<.001, \*\* p<.01, \* p<.05

この結果について、変数間の関係が分かるようモデル図に示した（図1）。図中には、教育アスピレーションと職業アスピレーションの相関も示した。図の上方は業績的（achievement）変数、下方は属性的（ascription）変数である<sup>7</sup>。このモデル図から、①Cエリアでは教育アスピレーションよりも職業アスピレーションのほうが属性的な要因によって決定される割合が相対的に高い、②職業アスピレーションは教育アスピレーションに比べて、相対的に性別の影響力が大きい、③とくにAエリアでは性別のみが職業アスピレーションの高低を規定するという3点がみてとれる。中学生の職業アスピレーションは、業績的な要因よりも属性的な要因、とりわけ性別の影響を強く受けているといえよう。

図1 モデル図



注) \*\*\* p<.001, \*\* p<.01  
 数値は、重回帰分析における標準化偏回帰係数の値を示したもので、パス・ダイアグラムではない。  
 教育アスピレーションと職業アスピレーションをつなぐ破線矢印上の数値のみ相関係数。

もっとも、A エリアでは職業アスピレーションを従属変数とした重回帰分析の決定係数が小さく、用意した変数だけでは職業アスピレーションを規定する要因について十分に説明することができていない。また用意した独立変数のなかでは性別のみが有意な結果を示した。このような結果について、中学生はまだ進路選択の緒にたばかりであるため、業績主義的な学歴獲得や職業選択のリアリティがない（進路意識の未発達）という解釈や、明確な職業のイメージがなく、あったとしてもあらかじめ性比に偏ったイメージに限られている（職業意識の未発達）という説明がなされる可能性がある。

しかし、C エリアのデータを同時に示すことで中学生の「意識の未発達」のみに原因を帰することはやや難しくなる。同じ中学生でありながら結果に違いがみられることは、社会構造の影響を分析に取り入れることの意義を示唆している。C エリアと A エリアとの違いは、地域によって異なる生活や家族のあり方、身の回りにある仕事や職業のイメージ、進学機会等の差異を反映したものではないだろうか。職業アスピレーションは個人のおかれた社会経済的・文化的文脈だけではなく、学校のおかれた地域的な文脈や個々の学校の取組みも反映している可能性があり、ゆえに教育現場に導入されたキャリア教育について、誰が優位な／不利な立場にあるのかを検証していくことは重要な課題なのである。

#### 4. まとめと考察

##### 1) まとめ

これまで明らかにしてきたことを簡単にまとめる。第一に、職業アスピレーションと教育アスピレーションの規定要因は、地域によって異なる。耳塚は、A エリアと C エリアの学力の規定要因の分析を通じて、「学力形成のありよう、とりわけ家庭的背景との関連は、地域によって一様ではない。われわれはこれまで、学力形成の社会的メカニズムを明らかにして、家庭的背景と学力の結びつきに警鐘をならしてきた。しかしながら、それらの結果は、もっぱら大都市圏およびその周辺都市における調査結果に基づくものであったことに留意しなければならない。（中略）私立中学校の有無、そこへの進学準備の必要性、それに対応した家庭の教育戦略（特定の階層に対してアスピレーションを鼓舞）等に関する地域的環境の差異が、学力形成過程の決定的な差をもたらししていると考えられる（耳塚 2006b: 12）」と指摘した。本稿での分析からアスピレーションの形成過程についても同様の指摘が当てはまる。

第二に、職業アスピレーションの形成過程において属性的要因が大きく影響を及ぼしていることが明らかになった。とくに A エリアにおいて性別の影響が顕著である。職業アスピレーションが性別や親の社会経済的条件といった属性的な要因によって規定されていたとしても、C エリアの場合、「努力」「学力」といった業績的な要因をそこに読み込むことができた。しかし A エリアではその余地はほとんどない。中学生が将来どういう職業につきたいと考えるかは、学力や家庭的背景、性別によって一定程度的影響を受けている。さらに、学校のおかれた地域的な文脈や、学校の取組みも影響を及ぼしている。したがって、教育現場に導入されたキャリア教育について、誰が有利な立場にあるのかを検証していくことは重要な課題だといえよう。

##### 2) 考察－潜行する性別役割規範

女子の職業に対する意欲や進路決定に性別役割規範が大きな影響を与えることは、1980 年代半ばから、学校社会学研究において常に指摘されてきた事実である。中西（1998）は女子の進路形成に作用する諸要因として学校外部の諸要因－全体社会の役割規範、労働市場、家庭文化－と学校内部のメカニズムに注目している。そして制度上の属性主義がほとんど解消された現在の学校では、性役割の社会化が「かくれたカリキュラム」として効力を持っていることを指摘した。

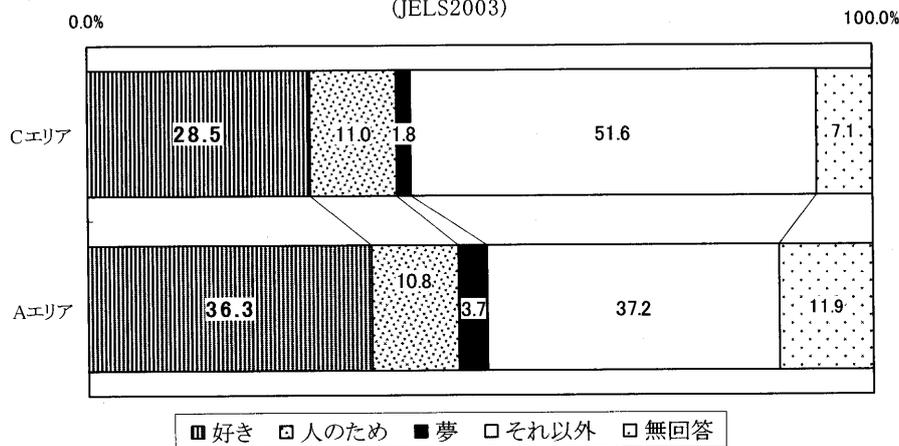
1990 年後半、トラッキングの進路に対する影響力に変化が生じていることが多くの研究によって観察されている。18 歳人口の減少と大学入試の多様化、高卒労働市場の縮小は、学校でまじめにすごそうというインセンティブをコントロールする学校の能力や、就職に果たす学校の役割についての信頼を弱らせることになった（Brinton 2000）。それはとりもなおさずトラッキングの進路規定力を弱体化させることにつながっており、学校生活に対する生徒のコミットメントの程度にも影響を与えたのである。また、トラッキングの進路に対する規定

力の弱体化に関して、教育改革の影響を指摘する研究もある。苅谷(2001)は、1980年代以降すすめられてきた「ゆとり」教育と「新しい学力観」に基づく教育が階層の影響を顕在化させてきたと指摘している。これらの教育改革は「試験で測られる成績のように学業達成のゴールが単純であったものから、子どもの意欲・興味・関心、さらには「問題発見・問題解決」というように、学業達成の意味や評価の基準を以前にも増して複雑かつ主観的なものへとシフト(18-19)」させ、結果として「それまでの、だれをも勉強へと駆り立てるプレッシャーを弱める(18)」ことにつながった。

このような状況に鑑みれば、中西の指摘した90年代初めの状況と現在とでは、学校内部を通じてなされる性別役割の社会化のメカニズムのありようは変化しているだろう。カリキュラムや教育方法の変化にもかかわらず、依然として性別が職業アスピレーションを規定する重要なファクターであり続けているのはなぜだろうか。

ここで注目するのは、1980年代以降の教育改革において、子どもの興味・関心を重視することが奨励されており、子ども自身による好みや得手不得手の理解は職業を選択する際のインデックスとして望ましいと考えられているという事実である。寺崎(2006)はある特定の言い回し-「好きだから」「夢だから」「人のためになる」-が子どもの職業選択理由に繰り返し登場することを指摘し、子どもは仕事を選択する理由に関する有効な(説得力のある)言語的資源の1つとして、これらを利用している可能性がある」と述べた。久木元はフリーターを対象にした分析から、彼らのもつ論理の内部に「自分の「やりたいこと」に忠実であることこそが就業をめぐる選択の際に説得的な根拠になる(久木元 2003:78)」構造があるため、実際のやりたいことの有無にかかわらず、「やりたいこと」を表明することがポーズとして成立する事態を指摘した。寺崎はこのような状況が、語彙の違いはあれ、中学生においてもあてはまると主張したのである。

図3 キーワードの利用率  
(Aエリア N=427 Cエリア N=717)  
(JELS2003)



この指摘に基づけば、性別が職業アスピレーションに影響をもたらすことについて、性別役割規範やライフコース展望といった明確なかたちではなく、一見性的には中立に思われ、かつ説得力のある理由の表明を媒介して達成されていると仮定することができる。図3は質問紙調査と学力調査の結果をマッチングできた者(Aエリア427ケース、Cエリア717ケース)について、「好き(だから)」、「人のため(になる)」、「夢(だから)」という3つのキーワードに注目し、これらのことばが職業選択の理由としてどの程度用いられているのかをみたものである<sup>8</sup>。Aエリアではこれらの語彙の利用率がCエリアよりも10ポイントほど高い。

「好き(だから)」という言説は主に保育士や幼稚園教諭を志望する場合の「子どもが好きだから」という理由として用いられており、そのほとんどが女子である。「子ども好き=女性の資質」という背後期待が働いているにもかかわらず、この理由が性的に中立なものであるかのように了解されるのは、子ども自身による好みや得手不得手の理解が職業を選択する際のインデックスとして望ましいと考えられているからである(寺崎・中島2005)。かつてなら、「女/男だから」「長男/次三男だから」「分をわかまえる」という理由、あるいは「成績が

悪いから」「成績がいいから」という理由で職業志望を決定していたが、ジェンダーへの関心の高まりや偏差値による「詰め込み教育」への批判のなかで、より教育的に望ましい職業選択の語彙を教育現場が進んで導入してきた。しかしその際、あらかじめ個人の好みに影響を与えるであろう社会構造の影響は考慮されていない。結果として、子どもの好みの表明のなかに、性別役割規範は潜行していくことになる。学校教育現場は「子ども好き」という資質が安易に「女性」に結び付けられることの問題は比較的自覚しているが、子どもの好みが社会構造—ここでは性別—の影響をうけて形成されるということには無頓着である。現在の進路指導のもとでは、子どもが学校外で身に付けたものは子ども自身の好みとして子どものなかに潜行し、矯正されることなく、むしろ望ましいものとして奨励されるというメカニズムがはたらいているのだ。

このような傾向について荻谷は「個人＝自己の尊重を原則とする「個人主義」、そしてその考えに連なる「自分自身にいい感じをもつこと feeling good about oneself」を重視する教育は、「階級に根差した社会の本質」と矛盾せざるをえない。その現実を無視して、ナイーブに自己の称揚を続けることは、階級に特徴づけられた社会構造の規則性に日常的に個人をしたがわせるイデオロギーの作用を助けることにほかならない（荻谷 2001：206）」と端的に表現している。本稿がもっとも危惧するのは、まさに現行のキャリア教育が性別に特徴づけられた社会構造の規則性に日常的に個人をしたがわせるイデオロギーの作用を助けることになる可能性である。動機の語彙のなかに潜行した性別役割規範は、研究者の目にとまりにくいものになったというだけではなく、それが他者からの疑義や批判を許さない性質を備えているために、問題が判明したとしても是正することが困難である。教育現場において普及したことばは一定の教育的価値をともなっている。子どもたちの「好きなことをやる」「夢をかなえる」ということばをどうやって疑うことができようか。まして「人のため」という道義的な理由をどうやって批判することが可能だろうか。その意味で、現在の主観的な自己理解に基づくキャリア教育の推進が巻き起こす問題は非常に根が深いといえる。現行のキャリア教育に対するこういった観点からの考察を深めることが今後の課題である。

## ＜註＞

- 1) 調査の概要詳細は『JELS 第1集』参照。
- 2) AエリアとCエリアとは調査実施時期やサンプリングの方法が異なるため、データを統合しない。AエリアではIDの記入率が低くマッチングできた数が少なかった。CエリアではAエリアでの結果を受け、各学校の協力を得て調査実施時に入念なIDのチェックを行ったため、マッチングの割合が高くなった。
- 3) 本稿において、SSM 職業威信スコアが子どもの職業アスピレーションを捉えるのに適していると考え理由は、第一に、ここで扱うのが実際の職業選択にはまだ時間のある中学校3年生であり、彼らの「しごと」に対する意識の仕方と、これまでのキャリア教育研究が扱ってきたような実際に就職を目前にした者、あるいは既に一度労働市場に参入した者の考える職業の「望ましさ」とは異なると思われるからである。むしろ総合的に職業を格付けしたSSM 職業威信スコアのほうが、中学校3年生のそれと近いのではないだろうか。第二に、従来のキャリア教育研究や進路指導場面では「教育的」にみて「望ましい」とされる職業・進路が高く評価される傾向がある。たとえば、フリーターの職業意識に関する先行研究の多くが、「専門的な知識・技術」を必要とする仕事や、「安定」した仕事を志向することを望ましいとし、逆に「有名」になることや「のんびり」暮らすことを望ましくないとする。あるいは、個性化・多様化政策下の高校で、「モデル」や「歌手」などが将来やりたい職業として多くあげられることを、より不安定な進路を志向する者が増加していると問題視する傾向も見受けられる。このように、「教育的」配慮を含んだ「望ましさ」と、「教育的」配慮以外の様々な価値観を含めたSSM 職業威信スコアとは、よりSSM 職業威信スコアのほうが子どものふだんの生活を通じたみだりな序列の認識に近いと考えるからである。
- 4) 用意した変数は次のとおり。「本（マンガや雑誌以外）がたくさんある」「自分ひとりの勉強部屋をもっている」「お父さんは大学を出ている」「ほぼ毎日「勉強しなさい」と言われる」「一ヶ月間に両親に勉強をみてもらった」「お母さんは大学を出ている」「博物館等につれていってもらった」「家の人は毎日決まった時間に起きる」「自分の家では食事を大切に考えている」「家の人は近所づきあいを大切にしている」。これらについて、回答者の家の様子に「あてはまる＝1」「あてはまらない＝0」のダミー変数とした。分析結果は参照に示した。
- 5) Cエリア、Aエリアともに、教育アスピレーション、職業アスピレーションのいずれに対しても、母親学歴は優位な関連を示さなかった。母親学歴が娘の進路選択に与える効果について、中西はその影響が母親の勤務形態にくらべれば小さく、場合によってはマイナスの効果を持つことを指摘している〔中西 1998：188〕。本稿でも同様の傾向が確認された。

参照 教育アスピレーション・職業アスピレーションの規定要因・家庭的背景(重回帰分布)

	Aエリア		Cエリア	
	教育アスピレーション 標準化偏回帰係数	職業アスピレーション 標準化偏回帰係数	教育アスピレーション 標準化偏回帰係数	職業アスピレーション 標準化偏回帰係数
(1)本(マンガや雑誌以外)がたくさんある	0.140 *	0.059	0.123 **	0.114 *
(2)自分ひとりの勉強部屋をもっている	0.111 +	0.009	0.052	-0.023
(3)お父さんは大学を出ている	0.226 **	0.119 +	0.213 ***	0.228 ***
(4)ほぼ毎日「勉強しなさい」と言われる	0.015	0.039	-0.046	0.050
(5)1か月間に両親に勉強をみてもらった	0.019	-0.041	0.011	-0.034
(6)お母さんは大学を出ている	0.107	0.002	0.054	-0.060
(7)博物館等につれていってもらった	0.059	-0.044	0.088	0.070
(8)家の人は毎日決まった時間に起きる	-0.062	-0.046	0.089	0.020
(9)自分の家では食事を大切に考えている	0.047	0.175 **	0.060	0.006
(10)家の人は近所付き合いを大切にしている	-0.025	-0.019	-0.071	-0.081
F値	4.754	1.515	7.079	3.733
sig.	0.000	0.134	0.000	0.000
調整済みR <sup>2</sup> 値	0.121	0.018	0.117	0.075

注) \*\*\* p&lt;.001, \*\* p&lt;.01, \* p&lt;.05, + p&lt;.1

- 6) 通過率とは、正答の場合を「通過」とした場合の、前設問数に対する「通過」となった設問数の割合である。得点とは異なる。
- 7) 図の上方に業績的変数を、下方に属性的変数を配置して、被説明変数に対する説明変数の影響力が、いったい業績的/属性的変数のどちらに偏っているのかを示すモデル図の示し方は耳塚(2006a)にならったものである。
- 8) 調査票では、あらかじめ将来やりたいしごとを具体的に聞き、次になぜそう思うのか、理由を自由回答で述べさせた。ここで分析するのは理由のほうである。自由回答のなかで「好き」「人のため」「夢」というキーワードが用いられていれば1とカウントした。これらのことが複数用いられていた場合は、「好き」をもっとも優先してカウントした。したがってこれらのカウントは互いに重複しない。

なお、本稿では、子どもの職業アスピレーションの高低を一元的な数値で把握することを試みたが、子どもの自由回答は研究者の抱く職業の枠組みとは大きく異なり、分析に用いることができたケース数が少なくなった。その意味で本稿の数量分析で得られた知見の一般化には注意が必要である。子どもの職業アスピレーションを測る方法は今後の課題である。

### <引用・参考文献>

- 荒牧草平 2001 「高校生にとっての職業希望」尾嶋史章編著『現代高校生の計量社会学』:81-106 ミネルヴァ書房
- Brinton, M. C., 2000 "Social capital in the Japanese youth labor market: Labor market policy, schools, and norms," *Policy Sciences* 33, 289-306
- 玄田有史 2001 『仕事のなかの曖昧な不安-揺れる若年の現在』中央公論新社
- 荻谷剛彦 2001 『階層化日本と教育危機-不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂
- 片瀬一男 2005 『夢の行方-高校生の教育・職業アスピレーションの変容』東北大学出版会
- 久木元真吾 2003 「「やりたいこと」という論理-フリーターの語りとその意図せざる帰結」『ソシオロジ』148号:73-89
- 熊沢誠 2006 『若者が働くとき-「使い捨てられ」も「燃えつき」もせず』ミネルヴァ書房
- 耳塚寛明 2006a 「教育アスピレーションの規定要因」『JELS第8集 Cエリア基礎年次調査報告』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間発達科学専攻 COE:31-35
- 耳塚寛明 2006b 「学力・家庭的背景・地域」『JELS第8集 Cエリア基礎年次調査報告』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間発達科学専攻 COE:5-13
- 耳塚寛明編 2000 『高卒無業者の教育社会学的研究』平成11-12年度科学研究費補助金報告書
- 文部科学省 2005 『中学校職場体験ガイド』
- 宗方比佐子・渡辺直登編著 2002 『キャリア発達の心理学』川島書店
- 中西祐子 1998 『ジェンダー・トラッカー-青年期女性の進路形成と教育組織の社会学』東洋館出版社
- 日本労働研究機構 2001 資料シリーズNo.112『中学生・高校生の職業認知』
- 日本労働研究機構 2003 資料シリーズNo.138『小学生の職業意識とキャリアガイダンス』
- お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間発達科学専攻 COE 2004 『JELS第1集 基礎年次調査報告(児童・生徒質問紙調査)』
- Sofer, C. 1974 "Introduction", *Occupational Choice*, W. M. Williams ed. (= 吉井弘(訳)『職業選択の理論-社会学の理論をめざして』誠信書房, 1980:1-52)
- 太郎丸博 2006 Theoretical Sociology (<http://sociology.jugem.jp/> 2006.06.06 職業選択の理論)

寺崎 興味・関心を重視したキャリア教育の問題

寺崎里水 2006 「「好き」を入り口にするキャリア教育の限界—子どものやりたい「しごと」をめぐる—」『年報社会学論集』第19号：95-106

寺崎里水・中島ゆり 2005 「小・中学生の「やりたいしごと」」『JELS第4集 細分析論文集(1)』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間発達科学専攻 COE：43-75

(2007年12月1日受理)